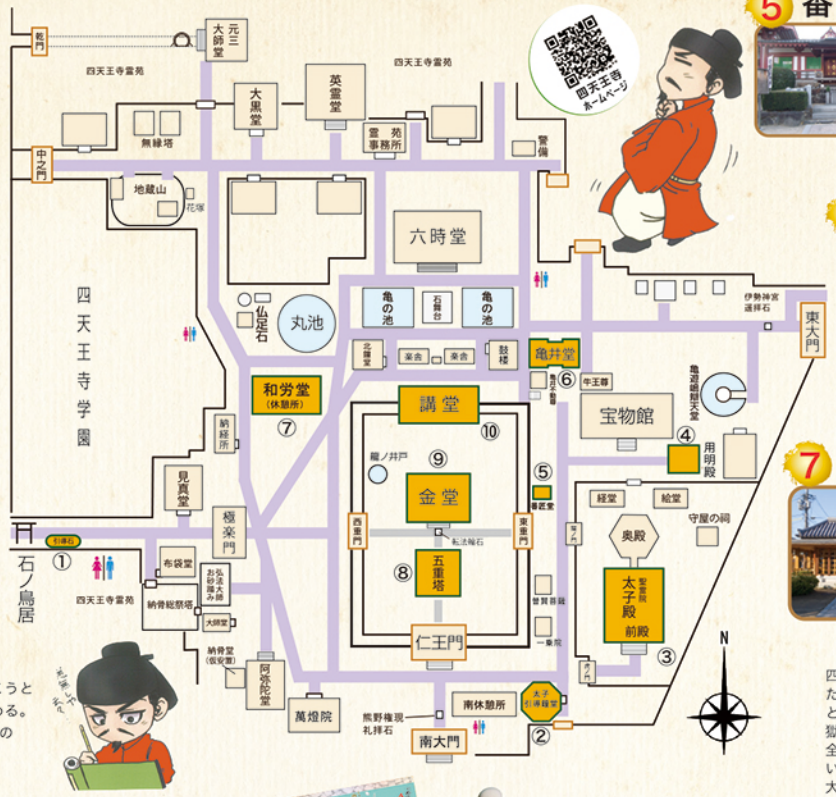
聖徳太子MAP

～聖徳太子ゆかり10のお堂めぐり～

聖徳太子ゆかりのお堂を歩く！

①引導石
↓
②太子引導鐘堂（南鐘堂）
↓
③聖霊院（太子前殿）
↓
④用明殿
↓
⑤番匠堂
↓
⑥亀井堂
↓
⑦和労堂
↓
⑧五重塔
↓
⑨金　堂
↓
⑩講　堂



1 引導石（いんどうせき）

四天王四石のうちの一つ。石鳥居から入りすぐ参道右側にある石柵で囲まれた石を、太子影向（ようごう）の「引導石」と呼ぶ。古来より、四天王寺の役人やこの地の者の葬送の際に、鳥居の前に棺を安置し、無常院（黄鐘楼＝北鐘堂）の鐘を三度撞けば、この石上に聖徳太子が現れて極楽浄土へとお導き下さると伝えられた。

2 太子引導鐘堂（たいしいんどうがねどう）（南鐘堂）

太子引導鐘堂の釣鐘には、民衆を仏法に導こうと願う聖徳太子の誓願が込められていると伝わる。ご本尊は阿弥陀如来で、堂内には永代供養のお位牌が奉安されている。

3 聖霊院（しょうりょういん）（太子前殿）

聖徳太子の御霊をお祀りする聖霊院には、太子前殿と奥殿、絵堂、経堂、守屋の祠、寅之門、猫之門がある。
前殿の本尊は「聖徳太子十六歳孝養像」、奥殿は「聖徳太子四十九歳摂政像」が祀られる。（どちらも秘仏）
絵堂には太子の生涯を描いた「聖徳太子絵伝」が壁面に掲げられ、経堂には大蔵経等の貴い経典が納められている。

4 用明殿（ようめいでん）

聖徳太子の父帝である第31代天皇の用明天皇をお祀りする用明殿は、もともと宝物館辺りに建っていたお堂で、江戸時代には徳川家康を祀る東照宮となるも、明治には用明殿と名称が戻った。昭和20年の大阪大空襲により焼失するも、令和元年に聖徳太子千四百年御聖忌の記念事業として復興された。

5 番匠堂（ばんしょうどう）

番匠とは現在の大工のことで、大工技術を日本に伝えた聖徳太子は、この番匠たちの間で大工の守り神として慕われている。厨子内には曲尺を携えた聖徳太子「曲尺太子」が祀られており、毎月22日のみご開帳される。周囲には金槌や鋸などの大工道具で「南無阿弥陀仏」と書いた番匠器幟が立てられています。

6 亀井堂（かめいどう）

お経木流しの水盤として利用している亀形石槽は四天王寺創建後間もない孝徳天皇の頃からこの場所にあると伝わる。この水盤に注がれる霊水「亀井の水（白石玉出の水）」は、金堂地下の水脈から湧いている水で、聖徳太子がその霊水に映った自身の姿を楊の枝で描き写されたたいう「楊枝の御影」は南側の厨子に祀られている。

7 和労堂（わろうどう）

「和み」「労わる」お堂として、ご参詣される方々のための無料休憩所となっている。堂内中央に聖徳太子像を祀る。
※新型コロナ感染症が蔓延している間は予防対策として閉堂となります。

8 五重塔（ごじゅうのとう）

四天王寺創建時、五重塔が建立された時、太子は塔の心柱に仏舎利6粒と自らの髻髪6毛を納め、六道（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天）の全ての衆生を利益せんと誓われたといい、「六道利救の塔」とも呼ばれます。大阪大空襲の被災により焼失してから現在の塔で八代目（昭和34年再建）となり、塔内には螺旋階段が伸びて、最上層までお詣りすることができる。

9 金堂（こんどう）

四天王寺の本堂。
堂内には聖徳太子の御本地仏である救世観世音菩薩を本尊としてお祀りし、その四方に四天王が守護する配置で祀られています。
堂内の大壁画は釈迦の生涯を描いた「仏伝図」で、中村岳陵画伯の作。毎日午前11時には参詣者の頭に仏舎利を戴く舎利出法要が厳修されている。

10 講堂（こうどう）

広い堂内は西側を夏堂、東側を冬堂といい、夏堂には阿弥陀如来、冬堂には十一面観世音菩薩が祀られています。講法堂とも呼ばれ、その名の通り経典を講讃し説教をおこなうためのお堂です。堂内中央の太子摂政像（秘仏）は、毎月22日のみご開帳されます。
ほか、壁面には郷倉千靭画伯筆の壁画「仏教東漸」が所せましと掲げられています。

大日本四天王寺
四天王寺